

私の独立記念日
I n d e p e n d e n c e D a y

自分の親を客観的にみられるようになるのは、大人になってからだ。今になって思うと、不思議で、強烈な母だった。

温泉嫌い

前号でもふれたように、靈感の強い母は温泉が大嫌い。若いときから温泉に入ると、お尻をツルっとなでられる。何とも言えない感触で、人間のものではないという。また、脱衣場で女性の霊に会ったこともあり、我が家は温泉旅行に行ったことがない。温泉で有名な群馬出身の父は、温泉に行きたかったらしいが、頑として母は首を縦にふらなかった。

何よりも仕事を優先

5、6歳の時のこと。急用で出かけなければならなくなった母は、幼い私を家に一人で置いておけないと、私を映画館に連れて行き、「一人で映画を見て待っていて。後で迎えに来るから」と置き去りに。映画は二本立ての身の毛もよだつ怪談だった。目をつぶりじっとしている姿に気づいた親切なおじいさんが、何かと世話をやいてくれた。映画が終了し外に出たが、母はなかなか現れなかった。

小学校3年生の夏休み。川崎の日本鋼管に務めていた母と、土曜日の午後2時、川崎駅のホーム(当時は小さな駅だった)で待ち合わせをした。横浜の自宅からバスと電車を乗り継ぎ駅に着いたが、待てど暮らせど母はこない。携帯のない時代、連絡の取りようもなく一人ポツンとホームの椅子に座り、本を読んで過ごした。

もしや、待ち合わせの場所や時間を間違えたのか？ 母が現れたのは、5時をまわっていた。急な仕事で残業したとのことで、あっけら

かんと「仕事は大事だから」と言った。

一人っ子の私は、家でも出先でもいつも一人で待つことが多かった。

なせば成る
為せば成る

母は何よりも負けず嫌いだった。7人兄弟(男3人・女4人)で一番勉強ができたが、女の子は子守りや家事の手伝いを強いられた。「勉強ができるのは幸せ。学校のテストは、授業で習ったことが出題されるのだから、100点をとるのは当たり前」が口癖で、「為せばなる 為さねばならぬ何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」をモットーとしていた。

人には能力、体力など個人差があるはずなのに……。

この他にも、「女性は男性に頼らず自立すべし」「日曜日は掃除の日で、外出禁止」など母の考えが家中に充ちていて、無口な父と私は、いつも母に従っていた。

そんな母に反発をしたこともあったが、“母ならこうする”と考えるのではなく、“自分はこうしたい、と主体的に行動できるようになったのは30代になってから。やっと私は、母からのインディペンデンスデイを迎えた。

